



佐藤亜希子さん（昭和47年生まれ、真室川町出身。）

新庄商工会議所 総務課長。  
 プライベートでは、チェリア塾（第2期修了生）の受講を  
 きっかけに地域活動に携わるようになる。  
 現在は「最上地域女性応援会議」の代表として、  
 30～40代のモガジヨメンバーを引っ張っている。

ちに助けてもらいながら、良い環境の中  
 で働いております。息子が新庄から山形  
 の高校に通っておりますので、毎日朝が  
 早く大変ですが、夫も協力してくれま  
 すので、仕事もプライベートも、もちろ  
 んモガジヨの活動も頑張ることができ  
 ています。

さて、早坂さんは大蔵村で女性初の村  
 議になられたわけですが、何事も初めて  
 というのは勇気がいることだと思います。  
 村議になろうと思ったきっかけは何だっ  
 たんでしょうか？

早坂 東北公益文科大学の伊藤真知子教授と  
 の出会いとキラッと〇〇RA☆DAが誕生  
 するきっかけとなった最上総合支庁主  
 催の講座ですね。真知子先生の「出る杭  
 は打たれるけど、出過ぎる杭は打たれな  
 い」というのがとても印象に残りました。  
 村の民生委員などを引き受けるように  
 なってから、周りから村議になるのを勧  
 められることもあったんですが、私がそ  
 れまで色々な役を引き受けてきたのは、  
 自分たち夫婦が各地を転々としてこれた  
 たのは高齢になった両親を見守ってくれ  
 た人たちがいたからこそなので、何とか  
 村に恩返しをしたいという気持ちからな  
 んです。だからそんなお誘いを受けても

らない場に突然入っていくという不安感  
 は無く、家族の反対も特に無かったん  
 です。選挙戦は初めてだったので大変でし  
 た。慣例にならうのではなく、ルール  
 に従った新しいスタイルを確立したいと  
 思い、支援者の方々の理解を得ていきま  
 した。

佐藤 そして見事当選されたわけですが、実  
 際に村議になられてどうでしたか？

早坂 大きな違いは、議員になった今は「やっ  
 て当たり前」ということです。なる前と  
 後では有権者の求めるものが変わってき  
 ます。内容も多様化していますから、正  
 直、様々な葛藤も生まれます。でも決め  
 たのは私自身ですから、揺らぐ気持ちは  
 支援者の方々に申し訳ないですし、私を  
 信じて一票を投じてくださった方々に中  
 途半端な姿は見せられません。まずは会  
 合の案内が来たら、可能な限り出席する  
 ように心がけています。すべてが勉強だ  
 と思っていますから。村のために何がで  
 きるか、目の前にあることに一つずつ取  
 り組んでいきたいと思います。

佐藤 少子高齢化が進む中、地方の小さな自  
 治体が抱える課題は益々多様化して増え

分にとっては自信のある分野です。今、  
 大蔵村では、若者たちが未来を語る会合  
 の場を設けるなどして人材育成を図って  
 います。役場職員や農業従事者、観光業  
 の方など様々な分野から若手が集まって  
 村の未来について話し合っています。これ  
 からは次の代のことを考えた村政が大事  
 になってきますから。大蔵村には志のあ  
 る若者が多くて頼もしいですよ。そつい  
 う若者をしっかり育てていくのが私たち  
 の役割なのかもしれませんね。

佐藤 早坂さんが村議として心がけていること、  
 村民の皆さんとの対話で努力されている  
 点がありますか？

早坂 支援者の方々に対して活動報告のお使  
 りを作って配っているんですが、その配  
 布は手渡しにこだわっています。ポスト  
 インだと声が聞けないでしょう？改まっ  
 た場ではなく普段の会話で聞き取る声っ  
 て大切なんですよね。でも、実際訪問し  
 てみると、お留守のお宅も多くてタイミ  
 ングがなかなか合わず、数回分をまとめ  
 て届けてしまうこともあるんですよ。そ  
 の点は今の反省点なんですけど。